

生命観の探究 重層する危機のなかで 鈴木貞美著

評・米本昌平 (科学史家)

生命科学が急展開し、地球環境危機が現実味を帯びてきた現在、本格的な生命論を誰もが待ち望んでいる。ただしそれは、生命科学の最新成果を並べたてたり、日本の伝統は「ニヒリズム」だ、儒教だと常套句を言いたるものではなく、ちろんない。今日へと至る、生命観に該当する思想の流れを追体験し、長期の議論に耐えうる枠組みを切り出してみせることである。

本書は、神でも物質でもなく生命を第一義におく思想的態度を生命主義と呼び、20世紀初頭の日本の思潮を「大正生命主義」と名づけて、生命観について壮大な鳥瞰図を展開する。著者は、リセプター(受容器)という比喻で、海外から思想が受容され鑄固される過程を説明する。たとえば、近代科学を受容する際に陽明学が果たした役割がこれで、陽明学の天とキリスト教的な神との、微妙だが重大なズレがうまく説明されている。

いのちの思想史の提唱



作品社 7600円

本書が抜群なのは、著者の明晰な課題意識によって、広義のイデオロギーから自由な視点の高さが獲得されており、歴史の中から生命観に該当するものを削り出してくる手際が、ブレがないことである。こうして、記紀神話、儒学、神道、小説、詩歌、西田哲学、欧米の近現代の思想、そして二度の世界大戦など、これまで断片的にしか扱われてこなかった、日本の生命観にかかわるたぐいさんの要素や課題が的確に要約され、考察に付され、関係づけられている。なかでも長大な歴史分析を踏まえた上での、第十章「第二次大戦後の生命観」、第十一章「新しい生命観を求めて」は出色である。シュバイツァーや岡本太郎を戦後の生命観の文脈で扱うのは卓見であり、また、生命論としての目的論の整理のし方は、いままでの最良のものであろう。漢としての生命観というものが、具体像を与え、そこに確実に成功している。国際日本文化研究センターから出るにふさわしい作品であり、新しい思想史家の登場である。

◇すずき・さだみ 1947年生まれ。国際日本文化研究センター教授・日本近代文学。